

三ッへ樵歌牧笛の声 人間万事様々に 世を渡り行くその中に 合 世の
 恋草を余所に見て 我は下萌えくむ春風に 花の東の宮仕え 忍ぶ便り
 も長廊下 合へされば結ぶのその神や あまの浮橋渡りそめ 女神男神
 の二柱 合 恋の根笹の伊勢海士小船 川崎音頭口々に 李調子音頭へ人の心
 の花の露 濡れにぞ濡れし鬢水の 合 はたち鬢の堅意地も 道理御殿
 の勤めじゃと 人に謳われ結い立ての 櫛の齒にまでかけられし 平元
 結の高鬢も 合 痒い所へ平打ちの 届かぬ人につながれて 合へ人目の
 関のわかれ坂

三ッへ春は花見に 心移りて山里の 谷の川音雨とのみ聞こえて松の風
 合 実に過って半日の客たりしも 今身の上に白雲の 合 その折過ぎて
 花も散り 青葉茂るや夏木立 飛驒の踊りはおもしろや 合へ早乙女が
 ござれば 苗代水や五月雨 合 初の人にも馴染はお茶よ 合 ほんにさ
 へ恨みかこつもな 実からしんぞ 合 氣にあたるとはゆめく 知らな
 んだ 合 見るたびくや聞く度に 憎てらしほど可愛ゆさの 合へ朧月
 夜や時鳥

へ時しも今は牡丹の花の 咲くや乱れて散るは散るは 合 散り来るは
 く 散りくくく散りかかるようで 面白うて寝られぬ 合 花見て
 あかそく 花には憂さをも打ち忘れ 合 三ッへ咲き乱れたる 風に香の
 ある花の波 合へ来つれて連れて 顔は紅白薄紅さいて 見するはく
 丁度廿日草 合へ牡丹に戯れ獅子の曲 実に石橋の有り様は
 三ッへその面わずかにして 苔滑らかに谷深く 下は泥犂も白波の 音
 は嵐に響き合い 笙歌の花降り 簫笛琴笙篳 夕日の雲に聞こゆべき
 目前の奇特あらたなり 引込舎

胡 蝶 (連獅子に同じ)

大摩へそれ清涼山の石橋は人の渡せる橋ならず 法の功德に自ずから出
 現なしたる橋なれば 合 暫く待たせ給えや 影向の時節も今幾程によも
 過ぎじ

乱序狂の舎方へ牡丹の花に舞遊ぶ 一ッへ葉影に遊ぶ蝶々の 風に翼かわして
 飛び巡る 獅子は勇んでくるくくと 李調子へ花に戯れ枝に臥し転び
 実にも上なき獅子王の勢い 合 獅子の座にこそ直りけれ